

書評と紹介

ガイ・スタンディング著／岡野内正監訳
『プレカリアート

——不平等社会が生み出す危険な階級』

ガイ・スタンディング著／池村千秋訳
『ベーシックインカムへの道

——正義・自由・安全の社会インフラを
実現させるには』



評者：鈴木 宗徳

現代の貧困・労働問題について精力的な発言をしているガイ・スタンディング(Guy Standing)の二つの主著、*The Precariat: The New Dangerous Class* (原著2011年)と*Basic Income: And How We Can Make It Happen* (原著2017年)の邦訳が刊行された。いずれもイギリスの書店で平積みされるような平易な文体であり、かつ目配りの行き届いた包括的な内容の著作となっている。現在イギリスでおこなわれている議論の広がりを確認する上で、もってこいの二冊と言える。

著者であるガイ・スタンディングのことを知りたければ、まず動画サイトで検索することをお勧めする。プレカリアートやベーシックインカムをテーマにエネルギッシュに講演する彼の動画が、ゆうに50件以上ヒットする。評者自

身も四年前の英国滞在中に彼の講演を聞き、会場が大学の教室であったにもかかわらず、聴衆のなかに仕事着のままのブルーカラー労働者が多いことに驚いた経験がある(私が『プレカリアート』の監訳者に話したこのエピソードは、そのあとがきにも記されている)。滞在中、他にもオーウェン・ジョーンズ(『チャブ——弱者を敵視する社会』の邦訳が出たばかり)やダニー・ドーリングなど、左派のジャーナリストや研究者が貧困や格差について語る講演を聞きに行った。いずれも素晴らしい内容で、こうした文化が日本よりも根付いていることを羨ましく思ったものだが、どれも聴衆の大半は中産層と思しき白人中高年であった。そのなかで、ガイ・スタンディングだけは異彩を放っていた。彼はプレカリアートに届く言葉をつかっ

て、プレカリアートについて語っていたのである。(以下、本稿では、『プレカリアート』には「P」、『ベーシックインカムへの道』には「BI」の略号を用いて、出典ページ数を挙示する。)

(1) グローバルな現象としてのプレカリアート

『プレカリアート』を読んでもまず驚かされるのは、著者の該博な知識である。同書ではプレカリアートを定義するのにとても慎重であるが、6年後に出版された『ベーシックインカムへの道』では、次のような定義が与えられている。すなわち、「プレカリアートとは、雇用が不安定で、職業上のアイデンティティを持たず、実質賃金が減少もしくは不安定化している、福祉を削減され、つねに債務を抱えているような人たちを指す言葉である」(BI:7)。前者の著作では、プレカリアートの発生という世界規模での大量現象が、その原因と個別事例

(女性、若者、高齢者、エスニックマイノリティ、障がい者、犯罪者など)に即して論じられている。

扱われる事例は実に多岐にわたっている。日本に言及した箇所を挙げるだけでも、プレカリアートの発生については、サラリーマン・モデルの萎縮(P:49)や1999年の派遣法の改正(51)について、そして2009年の年越し派遣村(52)についても触れられている。女性の貧困を論じた箇所では、日本の女性の半数以上が不安定な職に就いていること、男女間の賃金格差が先進諸国中最大であることなど、日本は極端な事例であると明言している(91)。若者について、「日本では、奨学金ローンを返済しなかった学生はブラックリストに載せられる」(110)という指摘もある。外国人については、日系人労働者の帰国支援事業(150)、技能実習生問題(160)、ネット右翼と在特会(222)といったトピックもしかるべき箇所で論及されている。

様々な国のケースを地球規模の視座から扱うことによって、本書は社会全体の大きな変動を描き出そうとしている。とくに印象に残るのは、移民や難民をプレカリアートの問題に位置づけて論じた、第4章であろう。スタンディングはしばしば、プレカリアートは「シチズン」(市民)としての権利の一部を制限された「デニズン」(寄留民)であると表現しているが、これは(次に述べる、条件付きでの福祉給付を受けさせられるウェルフェア・コンディショナリティの問題と並んで)移民や難民を主に想定したものである。なかでも、「国家規模でデニズン労働力を形成してきた」とされる中国農村地域の問題を論じた箇所では、農村からの約2億人の移民をグローバル・プレカリアートと呼んでいる(P:155)。例えば、2009年と2010年、中国の製造業者フォックスコンによる賃金

切り下げと労働強化によって自殺や自殺未遂が多発したことにも触れている。エスニックマイノリティとマジョリティを同じ観点から扱い、そして中国国内の人口移動と国際的な移動とを同じ観点から扱うことによって、読者にプレカリアート問題の広がりを感じさせることに成功していると言えよう。

(2) ワークフェア批判とコンディショナリティ批判

その一方、スタンディングの立論がイギリスの現在の福祉政策に対する批判に立脚したものであることも、見落としてはならない。すなわち、福祉手当の受給審査においてプライバシー侵害ともいえる資力調査が行われ、求職活動を義務づけるという条件を課し、申請者を監視して、これを怠った場合は給付を停止するといった制裁措置が講じられているのである。こうした、コンディショナリティ(条件付け)やワークフェア(勤労福祉)の思想に対置されるのが、無条件の現金給付すなわちベーシックインカムというシンプルな政策である。

ワークフェアという思想の背景には、失業者を怠惰な存在とみなす道徳的偏見があるとよく言われる。スタンディングが紹介するように、ワークフェアの主唱者であったアメリカの政治学者ローレンス・ミードは、政府は、福祉受給者が「自分自身を責めるように説得しなければならない」と述べている(P:209)。これは18世紀のイギリス救貧法の歴史にさかのぼる抜きがたいパターンリズムの伝統とも言えるが、上記のウェルフェア・コンディショナリティ型の改革(ユニバーサル・クレジットの導入)を立案したイギリスの雇用年金大臣イアン・ダンカン・スミスは、過去10年間で300万近くの職が移民に渡った一因はイギリス人が社会保障「中毒」になっているからだと言ったという

(P : 210)。

こうした福祉観は受給申請を思いとどまらせる効果を持つため、福祉国家の解体を企図する新自由主義と親和性が高いことはつとに指摘されてきた。しかし、スタンディングはむしろ、ワークフェアの背後にはこれまでの社会民主主義や労働運動が共有してきた労働中心主義／レイバリズムがあるとさえ考えているように読める。二つの著書に共通するのは、レイバリズムの時代が終わり、それを克服する手段としてベーシックインカムが必要であるという確信である。スタンディングは、もはや実質賃金の上昇は期待できなくなっているとし、法定最低賃金を引き上げても最底辺の貧困層の救済にはならず、逆に同じ仕事を短時間でこなすように強いられたりすると述べている (BI : 218-221、これには評者にも異論はある)。また、フルタイムの長期雇用を前提とした社会保険型の制度では、新しい不確実性に対応できなくなっているとも主張する (P : 152 ; BI : 223)。賃上げや社会保険制度からワークフェアまでをすべてベーシックインカムで乗り越えようという著者の思想は、レイバリズムおよび「働く権利」を中心とした20世紀型の思想を「安全」や「自由」の思想で乗り越えるという考えに則っている。これについてはのちに紹介するが、いずれにせよ、既存の社会保障制度や労働組合運動にどこまで期待すべきかを考え直すことが、読者には問われるのである。

(3) 労働と仕事における自由

スタンディングは、ワークフェアやコンディショナリティの矛盾を突くかたちで、ベーシックインカムの導入を根拠づけている。イギリスの現行の制度は、福祉受給者の多くは怠惰である、福祉依存であるといった偏見にもとづいて就労を強制することを狙ったものであるが、ス

タンディングは「失業の罠」(P : 68, 211 ; BI : 95)と「不安定性の罠」(P : 71, 211 ; BI : 95)という言葉を用いて、むしろ意図に反して就労意欲を阻害する制度であると説明している。「失業の罠」は、福祉受給者が低所得の労働に移行する際、イギリスでは限界税率が80%を超えており可処分所得が減ってしまうため、むしろ就労を妨げるというものである。「不安定性の罠」については、パルムドールを受賞したケン・ローチ監督のイギリス映画『わたしは、ダニエル・ブレイク』(2016年)が描いたように、条件付きの福祉給付は申請に手間とコストがかかり、申請者に恥辱感を与えるものであることを思い出せばよい。求職者は、短期間就労した後でまたゼロから申請をやり直すことを恐れて就労を思いとどまってしまうのである。こうした制度では本来とりたい行動をとれないし、働く意欲を奪っているのはベーシックインカムではなく既存の制度の方だ、というのが著者の主張である (BI : 104)。

スタンディングは双方の著作で、キャス・サンスティーンとリチャード・セイラーの著書『実践 行動経済学』(原題: *Nudge*)の立場をリバタリアン・パターンリズムと呼んで、批判している (P : 201 ; BI : 71)。「ナッジ(軽く肘で押す)」という言葉が表す、貧困者がとるべき行動を指図するような政策を、スタンディングはパターンリスティックな介入であるとして拒絶する。インセンティブをつけたりペナルティを与えたりといった政策がまとう道徳性を、彼は「うさん臭い」と呼んでいる。インドの事例として、2人目の子どもが生まれた後に不妊手術を受けることを条件に、1人目の子どもが成人になった時に現金が与えられるという給付制度が挙げられている。「選択アーキテクチャ」を創り出すこうしたリバタリアン・パターンリズムは、パノプティコンを設計したバ

ンサムの功利主義と同じであるとして、スタンディングは忌み嫌う（P：205）。子どもを学校に通わせたり、健康診断や予防接種を受けさせる条件をつけた条件付き現金給付についても、条件はつけなくとも好影響は得られるとして、否定的に紹介している（BI：262）。無条件の給付こそがパターンリズムを排し、自由な選択を可能にするというわけである。

彼は、ベーシックインカムによって自由と安全を実現できると主張する。自由については「共和主義的自由」という言葉を用い、これを、すべての人が本人の望まない干渉を受けず、干渉を受けるのではないかという合理的不安も抱かずにすむ状態であると説明する（BI：74）。アリストテレスは、まっとうな余暇（スコレー。「学び」という意味もある）のためには怠惰も必要だと、述べている。われわれは、上述の職探しの手続きなど労働以外の「仕事」、さらに再生産労働やケア労働など、労働の前提として必要とされる「仕事」をせざるをえない。時間のコントロールに困難を抱えるマルチ・タスキングの時代にあって、ベーシックインカムは、労働においても仕事においても自由を保証するとともに、ときどき怠惰に過ごす自由をも保証してくれる。さらに、現金給付の実験をおこなった途上国を例に挙げ、債務奴隷状態からの解放や女性の解放が可能であることを示し、（反対派の主張に反して）むしろ労働組合への加入が増える可能性についても、示唆している（BI：88）。

自由と並ぶ「安全」については、旧来の保険型のシステムで対処可能なリスクとは異なる「不確実性」、すなわち、グローバルゼーションによる予想外の打撃など（BI：111）について、定期的に定額を給付するベーシックインカムによってショックへの準備が可能になると主張している。

(4) ベーシックインカム論争をめぐる

『ベーシックインカムへの道』は、ベーシックインカムをめぐる賛否の立場について幅広い論拠を提示している。以下、そのなかから著者の立場のユニークな部分を紹介しよう。

スタンディングは、ベーシックインカムを、先人が創造・維持してきた社会共通の遺産から給付される「社会配当」とであると位置づける。共通の遺産というのは、共有地や天然資源だけでなく、特許など知的財産から得られる不労所得も含まれる。私有財産の相続と同様に、希少性ゆえに所得を生み出す「レンティア」も社会の全成員が相続すべきだという考え方である。これは、彼が格差の是正を目的としたベーシックインカムを構想しており、ベーシックインカム以外の福祉制度の全廃を主張する右派リバタリアンとは一線を画すことを示している（BI：68）。スタンディングは明確に、社会サービスや障がい者支援のための給付がベーシックインカムとは別に必要であること、先進国においてベーシックインカムを導入する際は、まずは既存の現金給付制度と併存させるかたちで少額から始めることを推奨している。

必要な財源についてはイギリスの現行制度を前提に様々な提案をしているが、所得の再分配機能を高める方向を軸に、企業向けの補助金廃止の提案や、それと並んで、給付付き税額控除もまた、それによって賃金を切り下げる企業にとって補助金の役割を果たしているのだから廃止すべき、といった提案をしているのが特徴的である（P：80-81；BI：155-156）。さらに11章では、ベーシックインカムをはじめ現金給付制度を導入した世界各地の実験プロジェクトが紹介されている。いずれも貴重な情報であり、ベーシックインカムを「どうせ実現できない」と切り捨てる水準から議論を大きく前進させる意義をもつものと言えるだろう。

恥辱感を与えるパターンリスティックな福祉を脱して共和主義的自由を実現する、というスタンディングの指針は、幅広い共感を集めうるものと評価できる。もちろん、ベーシックインカムだけがそれを実現する手段であるかどうかは、検討の余地がある。『プレカリアート』のなかで彼は、プレカリアートは形成されつつある段階にあり、対自的で自覚的な階級にはいまだなっていない、と述べている。さらに、プレカリアートが別のグループを「福祉のたかり屋」だと非難し、ポピュリズムの政治家にひきつけられてしまう危険性も指摘している。他方で、イギリスの若者たちは、若い頃の親たちよりも自分たちは労働者階級に属していると考え

ている、という指摘も見られる (P:100)。こうした新しい階級意識を醸成しつつある若者などのようにして共和主義的自由を勝ちとってゆくのか、その道筋がいま問われているのであろう。

(ガイ・スタンディング著／岡野内正監訳『プレカリアート——不平等社会が生み出す危険な階級』法律文化社、2016年6月、xv+289頁、定価3,000円+税)

(ガイ・スタンディング著／池村千秋訳『ベーシックインカムへの道——正義・自由・安全の社会インフラを実現させるには』プレジデント社、2018年2月、388頁、定価2,000円+税)

(すずき・むねのり 法政大学社会学部教授)



法律文化社

京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71 ●表示は本体価格(税抜)
http://www.hou-bun.com/

グローバルバリゼーション下のイギリス経済

●EU離脱に至る資本蓄積と労働過程の変化

櫻井幸男 著 今後の英国経済発展の筋道は何か。1979～2008年の資本蓄積の独自性、製造業を軸に分析、考察。新しい資本蓄積軌道の構築の必要性を説く。

●A5判・234頁・5,200円

序章 79～08年のイギリスの資本蓄積

1章 雇用削減による生産性上昇の資本蓄積

イギリスの脱工業化／製造業雇用の縮小の動き(50～07年)／先進国比較から導かれるイギリス製造業の資本蓄積の特徴／生産性上昇の独自のメカニズムを持つ資本蓄積軌道の形成／個人消費主導の景気回復／資本蓄積による長期的発展を妨げる諸要因／生産性上昇メカニズムが内包する諸問題

2章 日本の対英直接投資とイギリスの資本蓄積

80年代のFDIの全体的な動き／ヨーロッパへの日本直接投資／イギリスの対内FDIの趨勢／イギリス経済に対する外国企業の影響／日本の対英直接投資／「日本化」に関する議論

3章 グローバル下の労働過程とイギリス労働管理

グローバル下の労働過程論とは何か／不熟練労働から成り立つ生産過程—マルクスの生産過程論／熟練労働を含む労働過程論と形成される価値—プレイヴァマンの労働過程論／経営戦略による熟練創出の労働過程論—フリードマンの労働過程論／グローバルゼーションから展開された二重の労働力からなる労働過程論—アトキンソンの「フレキシブルな企業」モデル／グローバルゼーション下の労働の二重化とフレキシビリティ／グローバルゼーション下の労働の新しい問題と求められる企業組織／結びに

終章 リーマンショック以降の資本蓄積

グローバル・ガバナンス学 I / II ●各3,800円

激変する国際秩序の見取り図を描く。研究潮流の最前線を示す全2巻。

I 理論・歴史・規範 責任編集…大矢根聡・菅英輝・松井康浩

II 主体・地域・新領域 責任編集…渡邊啓貴・福田耕治・首藤もと子

日本外交の論点 佐藤史郎・川名晋史・上野友也・齊藤孝祐編

自衛隊拉致問題…日本が直面する26の課題を考える視点を提供。●2,400円

環境ガバナンスの政治学 坪郷 實 著 ●3,200円

持続可能な社会にむけて、統合的環境政策の理論・実践と課題を検討。●脱原発とエネルギー転換